

〔提 言〕

## 心を つなぐ

京都橘大学看護学部

河原 宣子

1994年に日本家族看護学会が創設されてから、2019年で25年目を迎える。人間に例えると成人前期、成熟期への入り口に立つ時期といったところだろうか。家族看護学の教育・研究・実践において、自立し得るか、発展性はあるかが問われる段階に入ったのだと思う。

一方、25年間で、「家族」のあり方も多様になった。いや、実は、そもそも「家族の多様性」を、その時代その時代で、私たちが勝手に切り取って見つめ直しているだけなのかもしれない。『万葉びとの「家族」誌 律令国家成立の衝撃』（講談社選書メチエ、1996年）という三浦佑之氏（古代文学研究者）の著書には、7世紀、8世紀の日本における家族の物語、現代風に表現すると、核家族、拡大家族、独居高齢者、育児、虐待等々の物語が生き生きと描かれている。三浦氏は『すべての人間が生まれ落ちたとたんに「子」として存在し続ける。考えてみればこれはすごいことではないか。何がとって、一人の例外もなくすべてがそうだということが。』と述べている。時代の変遷や環境の変化が家族に与える影響は多大であろう。それによって、「多様化した」かに見える様相もあるだろう。しかし、過去・現在・未来と常に地球上に存在し続ける「家族」には、変わらぬ本質もある。三浦氏の言葉を引用すれば『性と世代とを異にする人間が寄り集まって』『そこにすべての人間関係を抱え込む』という家族の有り様は昔も今も変わりはない。さらには生老病死と生活に直結しているために、家族には愛も憎しみ

も、様々で複雑な感情も存在する。綺麗事だけでは済まされない多面性がある。そして、その綺麗事だけでは済まされない家族に向き合うのが、家族看護なのだろうと、考える。

2019年、京都で開催する第26回学術集会は、メインテーマを「心を つなぐ」とした。「つなぐ」という言葉には、「受け継ぐ」「バトンをつなぐ（Carry the torch）」「いっしょに歩む」「手をつなぐ」といった家族看護実践の醍醐味と家族看護学のさらなる発展を期待する意味を込めている。これまでに蓄積された家族看護学に関する多様な知見を次代につなぐ（受け継いでいく）、人と人、家族と地域社会をつなぐ（いっしょに歩む）、看護職を始め多くの職種が手をつなぎ家族と関わる、そして、多様な学問分野とのつながりを築く、といった内容を盛り込み、議論を深めたい。

「つなぐ」という言葉には、縛る、縛り付ける、逃げないようにする、つなぎとめるといった意味もある（参考<https://japanknowledge.com/library/>）。家族であるが故に束縛されたり、目に見えない鎖につながれて負の感情を抱いたりすることもある。この家族から逃れたいという人もいる。だからこそ、喜怒哀楽も複雑多岐な関係性もすべてひっくるめて、家族看護という視座から家族によりそい、考究することに意義があるのであらうと思う。

2019年4月1日には新しい元号が発表される。時代がどのように移り変わろうとも、これからも、皆様と共に、家族看護の心をつないでいきたい。